一口案内

（土浦市）人口 14 万人、江戸期には、霞ヶ浦、水戸街道と水陸運に恵まれた土浦藩 9 万 5 千石の城下町として栄えた。近代はお隣のつくば市に県南のポイントが移ったが、歴史と自然に恵まれ、一歩足を伸ばすと日本一の蓮田が広がり、秋の夜空に全国花火競技大会の大競演。昨今はつくば霞ヶ浦りんりんロードで若者の心を掴んでいる。

（土浦まちかど蔵）江戸時代初期に水戸街道の宿場町として整備され、寺社と共に、一帯が文化の町として発展、江戸の末期には、見世蔵、袖蔵、元蔵、向蔵として「**大徳**」「**野村**」が商いの店として発展、現在は市民交流の場となっている。

（霞月楼かげつろう**）**創業明治22（1889）年、山本五十六、リンドバーク夫妻、吉田茂などの各界の著名人が訪れた土浦の歴史の舞台である料亭。貴重な資料は必見。

（予科練平和記念館）日露戦争・第 1 次世界大戦を通じ、航空機の重要性を痛感した旧日本軍は、大正時代阿見町に、2つの航空隊を設置した。霞ヶ浦海軍航空隊と土浦海軍航空隊である。現在は陸上自衛隊武器学校となっており、片隅に予科練出身没者の霊を慰める予科練の碑と遺品などを展示する「雄翔館」や「雄翔園」がある。
また昭和 14 年<1939>少年航空兵の養成機関である海軍飛行予科練習部（予科練）が、横須賀から移転、土浦海軍航空隊になった。桜と錨が描かれた「若鷲の歌」は、映画の主題歌と共に全国に知れ渡った。 海軍の町として歴史を歩んできた阿見町は、我が国の近現代史の中でも特別な時代を過ごし、日本が経験した戦争と平和を考える上で貴重な記録、資料を保存展示すると共に、次の世代に正確に伝承し、命の尊さや平和の大切さを考えてもらうため平成 22 年（2010）4 月に開館した。

若鷲の歌

作詩　西条八十
作曲　古関裕而

若い血潮の予科練の
七つボタンは桜に錨
今日も飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にや
でっかい希望の雲が湧く

燃える元気な予科練の
腕はくろがね心は火玉
さっと巣立てば荒海越え
行くぞ敵陣殴り込み

仰ぐ先輩予科練の
手柄聞くたび血潮が疼く
グンと練れ練れ攻撃精神
大和魂にゃ敵はない

生命惜しまぬ予科練の
意気の翼は勝利の翼
見事轟沈した敵艦を
母へ写真で送りたい